

八代集全註

八代集抄

下卷

2



八代集全註

第二卷

東京教育大學
名譽教授

山岸德平編

八代集抄下卷

初奏本金葉集
二度本金葉集
三癸本金葉集
八代集口訣

有精堂

昭和三十五年七月三十日 初版發行
昭和四十七年十月一日 七版發行

八代集全註(第二卷)

編者

山

岸

徳

平

發行者

東京都千代田區神田神保町一ノ三九
山崎

誠

印刷者

東京都千代田區飯田橋二ノ十四ノ一
株式會社 文弘社
堀 正 弘

製本者

東京都文京區小石川三ノ二一ノ六
誠光社製本印刷株式會社



發行所

東京都千代田區神田神保町一ノ三九番地
振替口座東京四〇六八四番

有精堂出版株式會社

落丁・亂丁はお取替いたします。

金葉和歌集

金葉和歌集 十卷

歌員八雲云、六百四十九首、又連歌 袋草子云、六百五十四首、此外連歌十九首

白河院御讓位ありての末に、俊賴朝臣一人院宣をうけ給はりてこれを撰ず。天治元年にうけ給りて、大治二年に上奏す。奏覽するところに、兩度返却あり。第三度のたび、中書の草案をもて覽するに、件の本左右なくをさまり畢。仍撰者のもとに此の本なし云々。件の本は、故待賢門院にあり。しかるに今の前相國實行申出してこれを書寫云々。此本には、兼盛・能宣が歌、並に玄々集・拾遺集の歌等これを入。拾遺は柄になして彌棄置せんのよしにてこれをいる、也。其本には、卷頭のうた貫之が「吉野山みねのしら雪いつきえて」のうた也き。此本は世に披露なし。世間流布の本は第二度の本也。近代の人の歌等なり。但六帖の歌、並に道濟・相模等これを入。卷頭は故將作顯季「うちなびき」のうた也。奏覽の本は造紙と云々。自筆に書之云々。時に基俊というものありて、和漢をかねたり。尤撰者とするに便りあり。然といへどもこれをうけ給はらず、若御不請の者とする歟。袋草子八雲等之儀略記

今鏡第七むさしの、草卷云、俊賴のきみ金葉集えらびて奉りたりけるに、はじめに貫之春立ことをかすがの、といふ歌、其次に覺雅法師とて入給ひけるを、貫之もめでたしといひながら、三代集にもれ來てあまりふりたり、覺雅法師もげにともつゝきおぼえずなど仰られければ、古き上手ともいるまじかりけり。又いとしもなくおぼしめす人のぞくべかりけりとして、おぼえの人をのみとりいれて、つぎのたひ奉りければ、これもげにともおぼえずと仰られければ、又つくりなほして、源重之はじめにいれたるをぞとゞめさせ給ひけるは、かくれて世にもひろまらで中たひの世にはちれるなるべし。

愚案 此説貫之の歌かはれり、いづれがいづれともいひがたき中に、袋草子の説は、まさしく金葉集同時の人の説なれば、たがはずや侍らん。第三度の始、重之の由は八雲御抄にもみえ侍。

今鏡卅源氏の御息所の巻に云、かやうの御歌どもむくのかみの撰び奉れる集に輔仁のみこと書たりければ、白河院はいかにこゝに見んほどかくは書たるぞと仰られければ、三宮とぞ書奉れる。御なからひはよくもおはしまさざりしかど御おとうとなればなるべし。

愚案 是初度の事にや、世上流布の本には三宮とか、れ侍。

撰者源俊頼は、大納言經信卿男。道方孫、李頭、天仁三年正月廿八月兼越前守。其述作の物、無名抄・山木髓腦・俊頼口傳等あり。家集一卷あり。

古人俊頼稱美

定家卿密勸云、彼朝臣は、すべて證本をひかへ、道理を正して、歌をよまぬ人にて侍る也。其身堪能至りていひといふ事皆秀歌の體也。帥大納言の子にて殊勝のうたよみ、父子二代双ぶ人なきに似たり。又年老て後、いよく此道にかたはらに人なしとおもひて、心の泉のわくにまかせて、風情のよりくるにしたがひて、おちずはからずいひつづけたるが、そしり難ずべきことほりも思ひつづけられず。あな面白、かくこそはいはめと見ゆれば、時の人も後の人もゆるしつれば、やがて先例の證歌になりて用ひ侍るなり。又云、基俊は、歌ハ俊頼に損ぜられぬるぞかし。まねび給ふな。眞名の文字もかゝず、知たる事もなきまゝに、わらはべのかたる事につきて、無邊法界のいたづらごと、うたによみちらす物ぞ。歌の外道なりとぞ常に侍ける。亡父は師匠金吾のいはれし事なれど、歌よむ人俊頼をもどきては、三十一字はいたづらごとになりなんとぞ申され侍し。又びたる人は其短を見る。のちの人は其このむにしたがふ也。

八雲云、基俊といふもの、此道の稽古ありて、俊頼に時々あらそふ折あり。然ば今の世まで二の流れたりといへども、

其骨俊頼に及ぶべからず、天下に肩をならぶ物なくて俊頼數年をへたり。

定家卿、近代秀歌云、俊頼朝臣「山さくらさきそめしより久かたの雲井に見ゆる瀧のしらいと」「おちたぎつやそうち河の早き瀬に岩こす波はちよのかずかも」是は晴の歌、秀歌の本鉢と申べきにや。「霧なくまのゝ入江の濱風に尾花波よる秋の夕暮」「古郷はちる紅葉々に埋れて軒の忍ぶに秋風ぞふく」是は幽玄におもかけかすかにさびしき體也。「あすもこんのちの玉河萩こえて色なる波に月宿りけり」「思ひ草葉末にかゝる白露のたまゝきては手にもたまらず」是は面白く見所有て、上手のしごと、見ゆ。「うかりける人を初瀬の山嵐よはげしかれとは祈ぬものを」「とへかした玉串の葉にみがくれて鵲の草ぐきめちならずとも」是は心ふかく詞心にまかせてまねぶともいひつゞけがたく、まことに及ぶまじきすがた也。鴨長明無明抄云、五條三位入道云、俊恵は當世の上手なりき、されど俊頼には猶およびがたし。俊頼は隙なく思ひいたらぬくまなく、一かたならずよめるが力も及ぬ也。

八雲云、俊頼朝臣、法性寺入道の會に「卯花のみなしらがとも見ゆる哉賤が垣ねもとしよりにけり」とよみて名をかゝず。時、人感之、此事無明抄にあり

金葉集の風鉢

鴨長明無明抄云、金葉集は、又態もをかしからんとして、輕々なるうたおほかり。八雲云、後拾遺・金葉の比よりのちさまのうたおほく、平懷なる鉢なれど、ぬけてよきうたは又おほし。

阿佛房口傳云、金葉・詞花などは、うたの姿かはりて、ひとふしをかしきところあるうたおほく侍る。いまめきたる事がちに候やらん。

金葉集の名目は、金は褒美の詞。葉は言葉也。諸家の金言をあつめたる心なるべし。又佛在世に、金葉の花ありし。さやうのよせある字をとり用ひて、此勅撰の集の名とせられ侍しなるべし。

金葉和歌集 卷第一

春歌

○春哥—或本春、又或本春部とあり。

○堀河院—七十二代。御諱善仁、白河院第二王子。御母中宮賢子、師実公女。応徳三年十二月十九日即位、此百首題は匡房奉ると今鏡に有。
○うちなびき春はきに—うちなびき万葉の詞也。押なべての心也。東風解氷月令

○春たちて梢に—まだきは速の字也。心は明也。

○いつしかとあけゆくそら—夜の明ゆくをよみて、天の戸よりやとよめり。戸あくる心也。

○つらゝるしはそ谷河—心明也。是まで四首、皆おなじ百首の中の立春の歌也。

○前齋宮内侍—作者部類河内同人歟云々。永縁妹、俊子内親王家女房云々。☆(編者注、内侍を改めた)
○春のくる夜のまの—心明也。東風解氷心なるべし。

○いつしかと春のしるし—朝原、大和也。あしたといふ心も、おのづから用られしにや。心明也。

堀河院の御時百首歌の歌めしける時、立春の心をよみ侍ける

修理大夫顯季 正四位下陸經子三位六條家祖

1 うちなびき春はきにけり山川のいはまのこほりけふやとくらん

春宮大夫公實大納言賢季子

2 春たちてこずゑにきえぬしら雪はまだきにさける花かとぞ見る

藤原顯仲朝臣 右大臣顯房子三位

3 いつしかとあけゆくそらのかすめるはあまの戸よりやはるはたつらん

令子内親王白河皇女

皇后宮肥 後肥後守定成女

4 つらゝるしはそ谷河のとけ行は水上よりやはるはたつらん

百首の歌の中に、初春の心を人にかはりてよめる

前齋宮河内永相女 ☆大藏大輔

5 春のくる夜のまの風のいかなればけさふくにしもこほりとくらん

初春の心を讀る

太宰大貳長實 顯季子 顯左大臣

6 いつしかと春のしるしにたつ物はあしたの原のかすみなりけり

○あらたまの年の初に―心明也。

○朝戸あけて春の―是も心明也。

○実行卿―八条太政大臣是也。春宮大夫公実子。
○少将公教―三条内大臣是也。八条太政大臣息。
○あさみどりかすめる空―常磐山は山城なり。不
変の名にしおへる山ながら、霞むけしきに春をし
らんと也。

○としごとにかはらぬ―春霞立田とそへて、年ご
とに詠めなれて、あかぬ気色余情あるにや。

○あづさ弓はるの―入佐山但馬なり。弓いる縁を
かけてなるべし。

○うぐひすのなくに―董翳抄云、まがねふくと
は、くろがねをふきわかす也。鉄を彼山にとる
也。きびの山とは、備中をいふべし。古今「まが
ねふく吉備の中山帯にせる……」吉備は備前備中
備後をいへり。まがね吹は備中也。

○けふよりや梅の立枝に―出、自國谷、移、于、梅木、
といへる詩の心より、よめるなるべし。又あなが
ちに詩の心ならでも、梅は鶯の宿りなれば也。

○けふやさは雪うち解て―年明ても、鶯のなきぬ
べけれど、いまだ春立ざるはとは、うちとけて都
になかざりしとの心をこめて見侍るべし。

正月ついたち、雪のふり待ればつかはしける 修理大夫顯季

7 あらたまの年のはじめに降りければはつ雪とこそいふべかりけれ

かへし 春宮大夫公實

8 朝戸あけて春の梢の雪みれば初はなともやいふべかるらん

実行卿の家の哥合に、霞の心をよめる 少将公教 母正三位顯季女

9 あさみどりかすめるそらの気色にやときはの山も春をしるらん

藤原顯輔朝臣顯季子

10 としごとにかはらぬものは春がすみたつたのやまのけしきなりけり

霞の心を讀る 太宰大貳長實

11 あづさ弓はるのけしきに成にけりいるさの山にかすみたなびく

百首の歌の中に、鶯の心をよめる 修理大夫顯季

12 うぐひすのなくにつけてやまがね吹きびの山人はるをしるらん

初聞、鶯といへる事をよめる 春宮大夫公實

13 けふよりや梅のたちえにうぐひすのこゑなる、はじめなるらん

正月八日春立ける日、鶯の鳴けるを聞てよめる 藤原顯輔朝臣

14 けふやさは雪うちとけて鶯のみやこにいづるはつねなるらん

○うぐひすの木つたふ―鶯のこゑはきけど、猶曉は、木伝ふさまの分明ならねばなるべし。風情ある歌にこそ。

○皇后宮―令子内親王、白河皇女、鳥羽院准母、前斎院。

○春雨はふりしむれども―降しめれども心なるべし。心は明也。

○梅の花にほふあたりは―花にあかで、ながめくらして、急ぐべき道をもとまりし心なるべし。よきては、よけて也。彼「花のあたりはよきてゆけ」とよみし詞也。

○うめがえに風やふく―風に吹匂ひて、袖もかうばしき心也。

○朱雀院―拾芥云、累代後院或号、四条後院、三条南朱雀西四町四条北西坊城東。

○けふこゝに見にこそり―けふかく人々の見にこそば、誰も見る人もなくちらんの心にて、閑庭といふ題をよめり。

○ちりかゝるかげは見ゆれど―心は明也。

あかつき鶯をきくといふ事をよめる

源雅兼朝臣

15 うぐひすの木つたふさまもゆかしきにいまひとこゑはあけはて、なけ

皇后宮にて人と歌つかうまつりけるに、雨中鶯といふ事をよめる

源俊頼朝臣

16 春雨はふりしむれどもうぐひすのこゑはしほれぬものにぞありける

良邊法師忍びて物へまかりけるに、左大辨經頼が家の梅さかりに咲ければ、門にひねもすに立くらして、夕つかたいひいれ侍ける

良邊法師

17 梅の花にほふあたりはよきてこそいそぐみちをばゆくべかりけれ

梅花夜芳といへることをよめる

前、太宰大貳長房後拾遺作者

18 うめがえに風やふくらん春のよはをらぬ袖さへにほひぬるかな

朱雀院に人よまかりて、閑庭、梅花といへる事を讀る 大納言 經信 中納言 連方子

19 けふこゝに見にこそりせば梅の花ひとりや春のかぜにちらまし

道雅、卿家歌合に梅花をよめる

藤原兼房朝臣後拾遺作者

20 ちりかゝるかげは見ゆれど梅のはな水にはかこそうつらざりけれ

○かぎりありてちりは―心明也。

○大_ニ中_ニ臣_ニ公_ニ長―散位公定子、三位云々。定長父云云。

○春日野の子日の松は―神さびはふりゆく事也。
春日野の余情も有て、おもしろくや。大木にならん陰に立かくれんと也。大_ニ中_ニ臣_ニの祖_ニ神_ニなれば也。

○はるがすみたちかくせ―引馬野、八雲御抄参河云々。霞はかくせども、松ひくために、此野に我はきたれりと也。

○かせふけば柳のいと―柳のかたよる風の、吹過るにつけて、春の日数をもおほしめしおどろける心なるべし。

○あさまだき吹くる―朝速也。早朝の心也。かたよりしけるは、しは助字にや。かたよりにけるとあるも、同心也。

○風ふけば波のあやおる―綾おるといふに、糸引そふるとよめり。波に文あるを、あやおるとよみなせり。朗詠に柳無_ニ氣_ニ力_ニ―条_ニ先_ニ動_ニ池_ニ有_ニ波_ニ文_ニ凍_ニ尽_ニ開_ニ。

○伊とか山くる人もなき―糸麗山、八雲御抄紀伊國云々。くる人もなきに、よぶこゑのさびしきさま也。くるほそき糸といふ詞の縁也。

○こゑせずばいかでしらまし―心は明也。

梅花をよめる

源 忠 季神祇伯頼仲子
宮内大輔

21 かぎりありてちりははつとも梅の花香をばこずゑにのこせとぞおもふ

子日の心を讀る

大_ニ中_ニ臣_ニ公_ニ長_ニ朝_ニ臣_ニ

22 春日野の子日の松はひかでこそ神さびゆかんかげにかくれめ

百首歌の中に、子日の心をよめる

大_ニ藏_ニ卿_ニ匡_ニ房_ニ大_ニ江_ニ成_ニ衡_ニ子_ニ

23 はるがすみたちかくせどもひめ小松ひくまの野べにわれは來にけり

柳絲リウシツ隨シ風フウといふこゝろをイことを、よませ給ひける

院 御 製白河院

24 かせふけば柳のいとのかたよりになびくにつけてすぐる春かな

百首歌の中に、柳をよめる

春_ニ宮_ニ大夫_ニ公_ニ實_ニ

25 あさまだき吹くる風にまかすればかたよりしける青柳のいとこゝろをイ

池邊、柳をよめる

源_ニ雅_ニ兼_ニ朝_ニ臣_ニ

26 風ふけば波のあやおるいけ水にいとひきそふるきしの青柳

呼子鳥を讀る

前_ニ齋_ニ院_ニ尾_ニ張_ニ

27 伊とか山くる人もなきゆふぐれにこゝろぼそくもよぶこどりかな

霞カスミ、歸キ鴈ガンといへる事をよめる

藤_ニ原_ニ成_ニ通_ニ朝_ニ臣_ニ大納言宗通子
侍臣大納言

28 こゑせずばいかでしらまし春霞へだつるそらにかへるかりがね

歸鷹をよめる

藤原經通朝臣

かくい

○いまはとてこしちに―はるかなる越路なれば、羽たゆく行かゝるらんと、おもひやる心なるべし。或説に、越路の雪かゝると、そへたり云々。如何。

○よしの山みねのさくらや―心は明也。たけ高きうたざまなるべし。

○白河の花見の御幸―今鏡七云、保安五年にや侍けん。二月に閏月侍し年白河の花御覽せさせ給ふとて御幸せさせ給ひしこそ、世にたぐひなき事には侍しか云々。猶委。

○たづねつる我をや―心あきらかなるべし。

○しら川のがれ久しき―同時同所にての歌也。心は明なるべし。

○ふくかぜも花のあたりは―是も同白河の御幸の時うた也。新院の御幸なれば、常の春とけふはことなれば、風も心して花をよけよと也。

○よろづよをためしと―是も同時なれば、君をいはひ奉りてよめり。けふにあふ花は、万代のためしと見ゆれば、水の面にも久しくうつしとめて、後のためしとなれとの心なるべし。

○としごとに咲そふ―猶栄んを見まほしと也。是迄同時歌也。

○京極の家―拾芥云、京極殿土御門南京極西南北二町。
○はるがすみ立帰るべき―心明なるべし。

29 いまはとてこしちに歸るかりがねははねもたゆくやゆきかゝるらん

花薫かん風ふうといふ心をよみ侍ける

攝政左大臣忠通公知足院白息

30 よしのやまみねのさくらや咲ぬらんふもとのさとに匂ふはるかぜ

白河の花見の御幸に

新院御製鳥羽院堀河院皇子

31 たづねつる我をや花もまちつらんけふぞさかりに匂ひましける

太政大臣作者源頼朝雅實六條右府子

32 しら川のがれひさしきやどなれば花のにほひものどけかりけり

人にかはりて讀る

太宰大貳長實

33 ふくかぜも花のあたりはこゝろせよけふをばつねの春とやは見る

待賢門院兵衛源子公實女上人云々

34 よろづよのためしと見ゆる花の色をうつしとよめよしら川の水

源雅兼朝臣

35 としごとに咲そふ宿のさくら花なほゆくすゑの春ぞゆかしき

宇治前太政大臣、京極の家の御幸の日讀せ給ける 院御製

36 はるがすみ立歸るべき空ぞなき花のにほひにこゝろとまりて

○しら雲とをちの—心明也。

○はるごとに松のみどり—松の間にみゆる花なれば、松のみどりに埋れて也。風のしらぬにはあらねど、只今盛の当意に付て、風にしらぬと、よみ給ふなるべし。

○この春はのどかに—松の常磐に、枝さしかはすしるしに、久しくちらで匂へとも也。

○山ざくらこずゑの—心明也。山寒花遅といふ題の心也。

○ちらぬまは花を友—心は明なるべし。

○花契ニ還年—玉篇に、還は遠也云々。花に、とはきとしをちぎるとなり。
○しら雲にまがふ桜—心は明也。白雲にまがふといふより、空にしるとよめり。

○よろづよに見るべき—たとひ万代まで見るとも、けふの御会の花の匂ひは、忘難からんと也。

遠山櫻といへる事をよめる

春宮大夫公實

37 しら雲とをちの高根のみえつるはこゝろまどはすさくらなりけり

松間櫻花といへる事をよめる

内 大

臣 作者源朝云有仁公
輔仁親王號花園

38 はるごとに松のみどりにうづもれて風にしらぬはなざくらかな

左兵衛督實能

39 このはるはのどかに匂へさくらばな枝さしかはす松のしるしに

山寒花遅といふ事を

左京大夫經忠 播磨守師信子
三位

40 山ざくらこずゑの風のさむければ花のさかりになりぞわづらふ

花爲ニ春友といへる事をよめる

内 大臣

51 ちらぬまは花を友にてすぎぬべしはるよりのちのしるひとがな

新院御方にて、花契ニ還年といへる事をよめる

待賢門院中納言

41 しら雲のまがふさくらのこずゑにてちとせのはるをそらにするかな

藤原顯輔朝臣

42 よろづよに見るべき花の色なれどけふのにはひをいつかわすれん

○しら雲にまがふ桜を―雲は山にかゝれば、我たづねぬ山もなき事をそへてよめり。拾遺「いづくとも所さだめぬ白雲のかゝらぬ山はあらじとぞおもふ」源氏浮舟巻「いづくにか身をば捨んとしら雲のかゝらぬ山もなくくぞゆく」

○よそにては岩こす瀧―峰のさくらを、岩こす瀧と見なして、よませ給ふなるべし。

○けふ暮ぬあすもきて―心明也。

○かゞみ山うつろふ花―花の色うつろふを、鏡の縁にみても、おもかげなどそへて也。心は明なるべし。

○みねつゞき匂ふ桜を―心明なるべし。

○さくら花さきぬる―雲は立のぼる物なれど、花の雲は、さなければなるべし。

○をのゝえは木のもと―春をかぎらで、久しく咲物ならば、立さらで、斧の柄をも、くたすべしと也。王質が山中にて、棊をみし事、拾遺の抄姿。此古事にて、山花といふ心をよめり。此歌、吉野

終日尋花といふ事をよめる

源貞亮朝臣橘樹守國成子土佐守

43 しら雲にまがふさくらをたづねとてかゝらぬやまのなかりつるかな

堀河院御時、女房達を花山の花見せにつかはしたりけるに、かへりまゐりて、御前にて歌つかうまつりけるには、女房にかはりてよませ給ける

堀河院御製

44 よそにては岩こす瀧と見ゆる哉みねのさくらやさかりなるらん

源師俊朝臣堀河右府子權中納言

45 けふ暮ぬあすもきてみんさくら花こゝろしてふけはるのやまかせ

山花を翫ふといへる事をよめる

太宰大貳長實

46 かゞみ山うつろふ花を見てしよりおもかげにのみたゝぬ日ぞなき

深山花をといへる事をい

攝政左大臣忠通公駿法性寺入道

47 みねつゞき匂ふさくらをしるべにてしらぬやまぢにまどひぬるかな

人々に櫻の歌十首よませ侍けるによめる

修理大夫顯季

48 さくら花さきぬるときはよしの山たちものぼらぬみねのしら雲

山花留人といふ事をよめる

大中臣公長朝臣

54 をのゝえは木のもとにてや朽なましはるをかぎらぬさくらなりせば

山峰に波よるの下、春毎にあかぬ匂ひの上にあり。但、随多本^二。

○ちりつもの庭をぞ一風吹ぬまに來たればこそ、かゝる盛をみれと也。源氏若紫に「宮人に行て語らん山桜風より先にきてもみるべく」

○やまざくらさきそめし一宗祇云、満山花なる折節見れば、さながら、雲より瀉の落るやうに見える也。もとより瀉なれども、花故、興をます心也。猶三光院御説在、詠歌、大概抄^一。

○はつせ山雲ゐに花の一高山の花盛、銀河の波と見ゆるさま也。

○よしの山峰に波よる一心は明也。峰に波よる雲の、波のやうに見える也。

○春ごとにあかぬ一毎春見てもあかぬ花の匂ひを、いかに情なき風の、をしまでふきちらすぞと也。

○よそにてはをしみに一是も前の時と同折に代作と也。よそにおもひしとは、かはりて近くみては、折て帰らまほしと也。

○春雨にぬれてたづねん一雨晴んとては、雨氣の雲を吹返す風ふくを、雲の返しの風といふ也。雨中に猶花を尋見るべし。雨後には風のちらすべければと也。
○月かげに花みる一浮雲の月をおほへば、花も見えざれば、花吹風のつらさにおとらざりけりと也。

宇治前太政大臣家の歌合に、櫻をよめる

皇后宮、攝津^{今鎮に津の君と有}

49 ちりつもの庭をぞ見ましさくら花風よりさきにたづねざりせば

源俊賴朝臣

50 やまざくらさきそめしより久かたの雲ゐに見ゆるたきのしらいと

大藏卿匡房

52 はつせ山雲ゐに花のさきぬればあまの川なみたつかとぞ見る

藤原忠隆

53 よしの山みねになみよるしら雲と見ゆるは花のこずゑなりけり

堀河院御時、女御の御かたの女房あまた花見ありきけるによめる

前齋宮筑前乳母

55 春ごとにあかぬ匂ひをさくら花いかなる風のをしまざるらん

人にかはりてよめる

僧正行尊^{圓南院法橋參議兼平子}

56 よそにてはをしみにきつる花なれどをらではえこそかへるまじけれ

後冷泉院御時、皇后宮の歌合に櫻をよめる

堀河右大臣

57 春雨にぬれてたづねん山ざくら雲のかへしのあらしもぞふく

月前見花といふこゝろをよめる

大藏卿匡房

58 月かげに花見る夜半のうき雲はかぜのつらさにおとらざりけり

○春の日ののどけき—心は明也。「そらにしられぬ雪ぞふりける」に、いさゝか風情をかへたる歌なるべし。

○花さそふあらしや—花のちりてながれくる事をいはで、花さそふ嵐や峰をわたるらんとといへる粉骨の所にや。

○けさみればよはの—庭にちりみちたるありさなるべし。

○中宮の御方—篤子内親王、後三条院皇女、前齋院、寛治五年四月に、入内し給ひて、中宮に立給ふ。
○こずゑには吹とも見えて—見えで、てもじにこそるべし。是にて、風静なる心也。下旬心明也。

○はるごとにおなじ—心明也。

○右兵衛督伊通—大納言宗通子、号九条太政大臣、又号大宮太政大臣。
○うらやましいかにふけ—我心のまゝに見まほしきが、自由ならぬを歎く心より、風をうらやむ也。

○みなかみに花やちる—心は明也。

顯季卿の家にて、櫻の歌十首人人によませ侍けるによめる

太宰大貳長實

59 春の日ののどけき空にふる雪は風にみだるゝ花にぞありける

水上落花といへる事をよめる

源雅兼朝臣

60 花さそふあらしやみねをわたるらんさくらなみよる谷川の水

落花滿庭といへる事をよめる

左兵衛督實能公實子 號徳大寺左大臣

61 けさみればよはのあらしにちり果て庭こそ花のさかりなりけれ

堀河院御時、中宮の御方にて風静花芳といへる事をつかふま

源俊頼朝臣

62 こずゑにはふくとも見えて櫻花かほるぞ風のしるしなりける

落花の心をよめる

長實卿 母中納言實仲女

63 はるごとにおなじさくらの花なればをしむこゝろもかはらざりけり

落花隨風といふこゝろをよめる

右兵衛督伊通

64 うらやましいかにふけばか春風の花をこゝろにまかせそめけん

水上落花といへる心をよめる

大納言經信

65 みなかみに花やちるらん山河のめぐいにいとゝかゝるしらなみ

○水のおもにちりつむ風は花をちらして、うき物とのみ思ひしに、今水面にちりつもりて、面白きに付て、かくよめりける心なるべし。

○ちりかゝるけしきは―心は明也。橋、在列が折梅^{ウヰメ}花^{ハナ}を而^{ナニ}揮^ヒ頭^{カビ}二月之雪落^{ユキノフ}衣^キといへるころにや。

○さくらばな雲かゝるまで―山のかたに、つませ給ひける心也。古今序に、高き山も、麓のちりひちよりなりて、あま雲たなびくまで、おひのほれる。又云、春の朝よしの、山の桜を……

○郁芳門院は、白河院皇女、寛治七年正月十九日院号。

○庭のはなもとの梢―いかにうき風にても、ちらすばかりを、本意とは思ふべからねば、庭の落花を、梢に吹返せとなるべし。

○ころもでにひるは散つむ―昼ちりかゝりし花なれば、今夜は猶いかにちるらん、と思ひやらるると也。ひる衣手にかゝりしが、よるは心にかゝると也。

○さくらさく山田をかへす―心は明也。返すくは、花をあかずみる心を山田を返す縁にて詠り。

○しら雲と峰には―心は明也。一本に此うたあり。兩本に此歌なし、見の字二所にあり、任本書之他本を可勘。

藤原成通朝臣鞠堪能

66 水のおもにちりつむ花をみる時^{折イ}ぞはじめて風はうれしかりける

落花衣にちるといへることをよめる

藤原永實<sup>清家子範永孫
信濃守五位</sup>

67 ちりかゝるけしきは雪のこゝちして花には袖のぬれぬなりけり

堀河院御時、花のちりたるをかきあつめて、おほきなる物のふたに、山のかたにつませ給ひて、^{簾子}中宮の御かたに奉らせ給へりける

を、宮御覽じて、歌よめとおほせこと有ければ、つかうまつれる

御^ミ匣^{ハシ}殿中宮女房

68 さくらばな雲かゝるまでかきつめてよしの、やまとけふは見るかな

花の庭にちりつもりたるを見てよめる

郁芳門院、安藝兼共なし

69 庭のはなもとの梢にふきかへせちらすのみやは心なるべき

夜思^{ユヱシ}落花^{ハナ}といへることをよめる

隆源法師<sup>山阿闍梨
若狭守兼教子</sup>

70 ころもでにひるはちりつむさくら花よるはこゝろにかゝるなりけり

春物へまかりけるに、山田つくるをみてよみ侍ける高階經成朝臣<sup>美濃守兼教子
常陸守</sup>

71 さくらさく山田をつくるしづのをはかへすくや花を見るらん

花を讀侍ける

右兵衛督伊通

72 しら雲とみねには見えて櫻ばなちればふもとの雪とこそ見れ

本のまま

○是を知らん人に「あたは夜の月と花とおなじくは心しれらん人に見せばや」
 ○中宮の御方に「一品皇子内親王、後一条院長女永承元年七月十日中宮にたゝせ給ふ。御年廿一、榮花物語卅六にあり。」

○春の夜の月の光―心は明也。下心は、春の夜の月を中宮に比し申て、中宮の御威光によりて、只今主上の御召にあづかり、南殿の花を見奉るよろこびをいへるなるべし。

○ちりはてぬ花の―残花のかほりて、其ありかをしらするをおもへば、ちらすといひしきせも、けふは嬌しと也。

○やまざとはのべの早蕨―心は明也。

○あづまぢのかはやが―八雲抄云、かはやが沼上野。万葉に、可保夜とかけり。仍或は、かはよがといへり云々。愚案此歌垣とそへて、春をこめてもとよめるにや。

○あら小田にほそたに―日本紀引「ガス」とよめり。水をひきとる事也。しめなはの内に流れゆく也。小田のしめ縄也。

○鳴のゐる野沢の―種まきし田には、注連引延る物なれば、其さま也。鳴のゐるは、野沢をいはんため斗也。

後冷泉院御時、月のあかりける夜、女房御供にて南殿にわたらせ給ひたりけるに、庭の花かつちりて面白かりけるを御覽じて、是を知らん人に見せばやとおほせ事有て、中宮の御方に下野やあらんとて、めしにつかはしたりければ、まゐりたるを御覽じて、あの花折てまゐれと仰せ事有ければ、おりてまゐりたるを、たゞにてはいかがおほせことありければ、つかうまつりける下

野太皇太后宮女房
後拾遺作者

73 春の夜の月のひかりのなかりせば雲ゐのはなをいかでをらまし

鳥羽院を申云々
新院の御かたにて、

残花薫風といへる事を讀る 中納言雅定雅實公子
中院右大臣

74 ちりはてぬ花のありかをしらすればいとひし風ぞけふはうれしき

ならにて人々百首歌よみけるに、早蕨をよめる

權僧正永緣大藏大輔永相子
興福寺

75 やまざとはのべのさわらびもえいづるをりにのみこそひとはとひけれ

百首の歌の中に杜若を

修理大夫顯季

76 あづまぢのかはやがぬまのかきつばたはるをこめてもさきにける哉

春の田をよめる

大納言經信

77 あら小田にほそ谷河をまかすればひくしめなはにもりつゝぞゆく

苗代をよめる

津守國基後拾遺作者

78 鳴のゐる野ざはの小田をうち返したねまきてけりしめはへて見ゆ